

葉色増す卯月のはじめ、釋尊降誕の日と云ふ、八日の夕暮れに下總國印旛郡萩原の出戸へ、御無事御着に相成りましたので、姫宮は申し上るに及ばず御供の面々も始めて安堵の思ひを致しましたが、姫宮には此地に三年の間御修行を遊ばし、薬師如來の冥助に依つて無比の妙薬を御感得遊ばされ、多くの病者をお救ひ遊ばしましたが、其中で今以て當寺に傳はつて居りますのが、癩病の治癒りまする妙薬とお白粉でムいます、此治癩丹とか申す薬の爲めに、天刑病などと云れて療治を受る事の、出来ない者が聞傳へて此地へ参り、或る處へ家を建て其處に住んで、斯の薬を服し全癒つたものが、何ほどあつたか知れないと申す事で、現に「カ

ツタイ畑」と申す古跡が残つて居ります、又白粉は演者も一ト袋頂戴致しましたが、普通の白粉と違ひまして色を白くし、肌理をこまかに爲る計りで無く、ニキビや其外の皮膚病に特効が有りますので、参詣者は必ず頂いて参ると申しますが、兎に角靈薬に違ひムいません、デ、姫宮には此地に御在留中は民の病人をお救ひ遊ばした計りで無く、蠶業にも深く御心を竭され、多くの婦女をお集めに相成り御自から、教導の任にお立ち遊ばし、我を信じて勵むものには我れ蠶の神となつて、其業を助けてやらうと仰有いまして、孜孜として御奨勵になりました餘風、今猶ほ界限に残つて居りまして、本村及び吉高村は勿論、有名なる甚兵衛の

渡を越た北須賀邊に至るまで、一般に養蠶が行はれ多分の産出を致すので、二何れも姫宮の御厚德に感泣を致さぬ者は有ませんが、中に就て特に有難いと存じましたは、孤兒院を御建遊ばし、多くの捨子を御救助遊ばしました事で、我國では斯んな慈善事業は、西洋文明國の模倣のやうに思ふ人も、何ぞ圖らん一千二百年の往昔、日本には疾くに設備されて在たとすると、當時の智識道徳の程度が、奈何に高かつたかと云ふ事が、推量られて床しく思はれます、デ、姫宮には都合三年と六ヶ月間、此地に御滞在遊ばされ天平勝寶の元年九月、御歸洛と云ふ事になりますと、日來御恩恵に浴して居ります者は、皆々父母に別

れます思ひでお名残りを惜みました、中に別して哀れを止めましたのは、長の御道中をお供を致して参つた例の十牛で、此際病氣の容子で、ムいますから、權の太夫の計らひで、這回は、お供の中へ加へんやうに致したのを、恚うしく分りましたか、夜に紛れて小屋を飛び出し、姫宮の御通行遊ばす御道筋の大池へ身を投て、無慙の最期を遂たと云ふ、之れは演者が漫遊の砌り、立寄て見て参りましたが、成程現今と違ひ大木が繁茂致して居た大古は、人通り杯も無つた處だらうと思はれました、左右が山で真中の窪い所が池で、ムいまして、八町四方も有つたと云ひ、第一底の深い事と云つたら、何程有るか測量した者が、一人も無いと申す

位だから随分物凄うムいます、一説に斯の牛が姫宮に別れ奉まつるのを悲しみ、此の池の中へ身を投て死んだが、靈魂化して大きな蠅となり、今だに池の底に住で居りまして、春秋の候に二三回位丘へ上つて遊ぶ事が有る、何しろ素敵に巨大なものだから、出會た者は何れも色を失ひ、中には氣絶をしたのも昔時は有たさうでムいますが、性質が至つて柔順で鎌首を持上げて人を追懸るの、毒氣を吹きかける杯と云ふ惡さを爲ない事が、今では一般に知れ渡りましたから誰一人畏るゝ者も無く、小兒等は惡戯に石を打付けたり、棒で叩いたり何か爲るが、蠅の方では更らに頓着しやうでも無く、寛りと遊ぶだけ遊んで了ふと、池の中へス

ルくと潜り込んで姿を隠しますので、何とも無く『牛潜り池の愚鈍蛇』と言れまして、飛んだ愛敬者に爲つて居りますと、茶店の老婆の話を聞いて演者も一興を催ふしましたが、斯の松蟲村の位置は印旛沼の西に當り、東京から行くには兩鐵道に據るのが便利でムいます、則ち上野と兩國とで、兩國驛から發しますのは千葉佐倉を經まして酒々井で降り、上野驛から致すものは小林若くは松崎で降り、甚兵衛の渡しへ懸る、尤も何れに據りましても、道程に大差はムいません、松蟲寺の附近には櫻樹が多く植つけられて有て、艶陽駘蕩の彌生の頃は花見客が殊の外群集致し、境内には姫宮の御廟が有り此外にも、行基僧正がついて來た杖

に根が付たと云ふ大公孫樹がムいます、之が又不思議で地上から二間計り上の枝に、瘤のやうな物が三個下つて居まして、恁う見ても女の乳房でムいます、此皮を繕つて煎じて服むと如何に乳の不足の者でも、溢れる程出るのは受合だと云ふ事で、今でも削り取る者が有るとの事、其れから庫裡の入口の前に白銀杏と云ふのがムいますが、之が又珍な理由で臼にして使用して居るうち、何の間にか根が出来て枝葉を生じたとの話に、演者も近付て篤と見ましたが、全然で何處からか持つて来て据たやうでムいます、其れから此の寺の四五丁の間だに、本文に述べて有る姫宮の御乳母、杉目の刀自の墓と云ふのがムいます、三角になつて居る往來の

真中に在つて、誰でも一寸異様に思ひますが、土人の説に依りますと昔時は二方道で有つたのを、此の墓の前を馬上で乗打ちでも致す者が有りますと、必ず馬から落されて怪我を致しますので、村民が畏れて墓の後ろへ新規に道を付けたのだと云つて教へて呉れましたが、然う聞て成程と合點が参りました、デ、其又前に癩の庚申と云ふのが有る、之も十二舊跡の一ツで石の像が癩に喰ひ取れたやうに爲つて居ると云ふ、靈驗極めて炳然にて、年中信者の足跡絶たる事無く、全快のお禮に納めて行く繪馬の數も、却々夥しいもので、松蟲寺の門前に岩井稻藏氏と云ふ、篤志の老人が住んで居て、依頼ば快く案内して名所舊跡を見せて呉れ、

説明も爲て呉るので近年參詣者が、非常に殖ゑて來たと云ひますから、成田へ行れる人は電車で宗吾靈社を拜み、花島山將門山等の各名所を経て、松蟲寺へお越になると確かに一日の清遊が試らみられます、殊に炎熱蒸すが如き夏向きには、砂白く松青く、東の須磨の浦と云ふ名稱の有る、印旛沼の風光を御覽なさるも宜しい、涼しい事と言つたら眞に夏知らずで、深いと言つても僅かに膝位の水中へはいり、鯉鮒鯰鰻沙魚海老の類を、自由自在に漁り、或ひは名物の『たんかひ』掘り、蜆拾ひ、夜るは篝を焚て暗中風に委して船を流すと、此火を目懸けて一尺位づゝも有る大鰯が、幾つとも無く船中へ飛入りますのを、引捉まへるのは何

んとも言れぬ面白さでムいます、未だく松蟲姫の御德行に就ても、又花井權の太夫が後年此地へ再び來りし事及び、稚兒捨山の話などが澤山残つて居りますが、紙數に限りがムいますから、之れにて御免を蒙ります。

松 蟲 姫 終

名なし嫁

蒼海生

大石内藏助の妻子眷族の事は講談にも申し傳へて大體は御存じで入ッし
やいますか恚うしたものでムいませるか昔しから間違つて居るのを其れな
り演じて居るかのやうに思はれ小生は甚だ遺憾に存じますので聊か辛苦
を致して種々の諸記録ものを調べ由縁の土地へまでも出懸けて往て穿鑿
を爲たり何か致しました故少しは得た處がムいますと信じまして今回お

十九歳で死亡しましたが墓は母親と同様國泰寺に在りまして法名は松巖院忠幹蒼榮居士……此人の事に就てもお嘶しがムいすが長くなりますから控へまして直ぐと本題へ取懸ります……、デ、時代は正徳年間の事京都の祇園町に至つて福裕に暮して居ります茶屋宗固と申す仁がムいしました見世も繁昌致しまして上下廿人と云ふ大身代主個の宗固は渡世柄に似合はず風流の道を好みまして各方面の人々に交はり面白をかしく世の中を消光て居りますが此家へいつからとなく出入を致します半右衛門と云ふ武士の浪人が有ります此人は年齢が四十四五學問も相應に出來茶俳諧の道にもたづさはり分けて圍碁が高手でムいますから毎時此の宗固

の宅へ參つては半日一日遊びつゞけ興に乗じますと泊つてまでゆくと云ふ交情でムいます。

半「イヤ今日は……」

宗「オ、之れは能くお光來になりました貴公がさつぱりお見えにならぬので如何かなすつたのでは無いかとお案じ申して居りました……」

半「へー有難う如何も爲たものではムいせんが國許から客が有つて京見物の案内を頼まれ毎日く其れに計り懸りまして」

宗「エ、夫れはへー御苦勞さまでムいました如何でムいます今日は過般のやつを」

半「左様でゝる拙者も彼れぎりでは残念ゆゑ是非勝敗を決したい考がえ
で……」

宗「ハ、其れは結構恠うか然うお願ひが致したいもので……」
と是から半右衛門を奥座敷へ通して飯より好きな圍碁を打ち始めました
が相替らず遅くなりまして漸やく亥刻ごろに打止め其れから例の如く一
ト口始まつて暫時く盃の献酬を致して居りましたが頓て宗固は額に手を
加へまして少し嘆息の體で。

宗「半右衛門さん貴公も御存じの忤でムいますがモー廿三でムいますか
ら相應の娶をと云ふ考がえで諸方へ頼んで居りますが未だに好適のが

見つかりませぬ貴君も一ツお心掛下すつてモシ好いのがムいましたら
萬望かお橋渡しを願ひたいもので……」

半「いかさま御子息も御年配御尤千萬併し御主人御當家は個様な御大家
ゆるゑ娶御には何にかお望みでも有るので御座いますのか」

宗「イエ別に望みと云ふ譯でもムいませぬが有體に申せば筋目の好い身
分の有る者から成る可く貰ひたい考がえでムいます」

半「フーン然らば御主人拙者方に一人心當りがムるからお世話致さう併
し只今直ぐと申しては少々早いやうに存じますから此上二三年御辛抱
は願はれまいか御承諾とあらば拙者刀に懸けてもお請合致す如何でム

る」

崇「尊公が之れならばと思し召す娘が有りますならイエモ遅れつひで二年が三年でも必平俟ちませうが其曉になりましてお断りにでもありませんりましては手前迷惑を致します」

半「之れはしたり御主人拙者も武士で二枚の舌は遣ひませぬお世話すると申したがさるご必らずお周旋致さう少しもお氣遣ひ下さるまい……………」

崇「左様でムいますかデワ是非一ツお骨折をお願い申します……………」
半「委細承知致しました呉々も少々延びます處は御猶豫を願います……………」

此晩は之れで話説がきれて半右衛門は馳走になつた禮を厚く述べて歸りましたがサア如何したのか其れツきり其後は半右衛門が一回も出て参りません始めの間は何か用でも有つて來ないのだらうと思ひましたが三月經過でも半歳經過でも出て参りませんので遂に宗固は氣を揉み出しました最も延びると云ふ事は半右衛門が數回申した口上で自分も承知でムいますから是迄の如く半右衛門が出入を致して居れば何も心配も致しませんか約束だけ爲て歸つた儘顔出しをしないとすると何んだか便り無く思ひ萬一や病氣で居るのでは無いかそれとも死にでもしたのでは有るまいかと大層胸を痛めまして見世の若い者を遣つて四條堀川の半右衛門の佗

佳居を窺はせますと半右衛門は壯健で毎例の通り手内職を致し別に變つた容子は少しも無いと聞き如何しても合點が参りません其間には諸方から縁談を持込み中には惜しいと思ふやうなものもムいますので宗固の女房が怵へかね。

女房「ねえお前さん半右衛門さんは如何したのでムいませう彼れ程正確に約束をして置ながら顔出しを爲ないのは不思議では有りませんか萬一したらお座なりのお世辭に目的も何にも無いのを有るらしく話したので氣まりが悪く此方へ來るのが來にくくなつたのでは有りますまいか若し然うだと俟て居るのは馬鹿々しいから宜加減に思ひ切て好適の

が有たら一日も早く極た方が宜しうムいませう」

嵩ウムお前が然う思ふのは道理だが半右衛門さんは何んでも以前は立派な武士に違ひないモ一五六年も交際ふが只の一回も嘘言を吐いた事が無い潔白のお方目的の無いものを有る顔にお座なりを仰有るやうなそんな薄つべらな仁ぢやア無いマア黙つて俟つて居るが可い……」
と毎度斯んな押合で要領を得ずとうとう正徳の元年から中一年を隔て同く三年の十月と相成りましたと或る日久し振りで彼の半右衛門平常の粗服とは打て變り黒羽二重の紋付の小袖同じ羽織に仙臺平の袴を着用に及びまして二人の仲間に吊臺を擔がせてはいつて参りました。

中「儲御主人存外に御無沙汰を致しました相變らず御壯健で祝着に存じます……」

宗「是はく半右衛門どのでムいましたか好くマアお越し下さいました何卒奥へお通りを願ひます……」

中「然らば御免を蒙ります」

とズキと奥へ通りました毎例の半右衛門ではムいません第一扮且も立派で何んと無く改まつて居りますから宗固に於きましてもお茶よ煙草盆と叮嚀に待遇ひまして。

宗「如何う成さいました彼れぎり一回もお見えになりませんので實は甚

はだお案じ申し毎日お噂さを致さん事はムいません……」

中「ハイ有難う存じます拙者も斯く御無沙汰を致すのは不本意でムるが其れも畢竟お約束を致した娶御のお世話を致したい斗り、デ、其節も申し上げたる如く當年は最早結婚致しても差支ひ無き年頃に達しましたる故今日黄道吉日なるを幸ひ御結納のお取替せを致したく右に付拙者態々參上仕つりました」

と恭しく述べたのでムいます之れを聞た主個の宗固聊か面食ひの氣味で頻りに頭を揆きまして。

宗「へー成る程……奈何にも其お話しは承知致して居りますが只有ると

云ふ事を伺つた斗りで先方が何家だか御當人が恁のやうな御容子か何にもかも知らないづくめで御縁組を致すと申すのはチトハヤ……」

半「チトハヤとは何んでムる貴殿も拙者を侍と思し召てお頼みにも爲つた譯拙者も又刀に懸けてお請合ひ申すと云つたからには筋目は勿論當人の容儀萬端誰に聞かしても耻かしいやうな者は決してお周旋は致さん但し彼れ程お頼みなされたのは御座興でムるか今になつてチトハヤなど仰せられては武士の一分が相立ちませぬ御返答の摸様に依つては拙者にも存じ寄がムる』

と傍へ置てある一刀を引き寄せましたので宗固はブル／＼として眞青に

相成り全然で藍壺へ嵌つたやうな顔色で。

宗「マ一恁うかお冷靜に願ひます我儕も宗固でムいます尊公を見懸けてお頼みを爲たのでムいますから今更お疑ぐり申して彼是異議を申すのではムいせんが餘り出し抜けゆゑ心元無く存じツキ不調法の事をお聞かせ申し御立腹を掛けました段は畏れ入ります萬望か御勘辨にあづかり委しくお説明を願ひまして其上で仰せの通り結納の取替せを致す事に仕りませう』

半「デワ委しく聞なければ出来ぬと仰有るので到底何にを世話をするかわらんから聞た上で如何にか爲やうと云ふ御心底と見えます而て見ま

すと私を見懸けて頼み私を信じてお任せになつたのでは無く矢張り桂庵同様に思はれたものと察しられ奈何にも心外でゐる拙者も武士の端くれ貴殿に愚弄れたとすれば亡き主人へ對しても此儘黙つて引込む譯には參らん御迷惑ながら座敷を拜借致し腹搔き切て無念晴しを仕つるでムらう御免下さい……』

と半右衛門脇差の柄へ手を懸けましたので宗固は慌て、其手に取絶りまして。

宗「マ……恚うかお氣をお鎮め下さい其様に仰せられては何んともお返辭の致し方がムいませぬ尊公をお信じ申さんと云ふ譯で無い事は申す

迄もムいませぬが私の申しやうが悪いので然う思し召すのでムいます此上は尊公の仰せの通り早速結納のお取替せを致しませう』

半「然らば先方の名も申さず當人もお目に懸けず都て拙者にお任せ有つて此の縁組を取結ばうと仰せられるか……』

宗「如何にも左様……拙者は先方にも當人にも構はず尊公を信じましてお貫ひ申す事を承知致しませう』

半「然う伺へば拙者に於ても申し分はムらん早々取計らひませう萬望が御令室御子息を此處へお呼び下さるやう……』

宗「心得ましてゐる』

と宗固は女房や忬を招きまして結納の取替せを爲る事を話しましたので
 餘り不意でムいますから女房も忬も顔を見合せ何んだか變に思つて猶も
 容子を聞きたく思ひますが半右衛門が嚴然と致してモシ何んとか云たら
 斬つても捨まじき權幕に畏れを抱きまして澁々承知の旨を述べましたか
 ら半右衛門は漸やく顔色を和らげ。

「イヤ…早速御承知下さつて拙者も満足を致した左様なれば結納の品
 々目録書の通り目出度お請取り下さるやう……」
 と述べまして仲間ちゆうげんに吊らせて参りました吊臺つりだいの中から取出し自分で座敷
 へ運び入れましたが武家の結納は町家で扱ひますものとは違つて却々凛

々しいものでムいます宗固は頓て請取書を書いて半右衛門へ差出しまして
 宗「今日は何分俄然の事で用意が爲てムいませんから手前より差上げる
 結納の品は明日此方より送る事に致したいが如何でムいませう」
 半「成る程如何にも早急の事でお手當の無いのも御尤も然らば其れは仰
 せの如く明日と致し其代り右の取替せが濟み次第直ぐさま娶御の諸道
 具をお届け申し先方も急いで居りますから明後晩輿入れと云ふ事に願
 ひたい尤も婚禮の儀式等は武家の儀式とは多少相違もムらうから夫れ
 は貴殿にお任せ申さう先づ之れにて御相談は確定たと申すものでムる
 併し御主人先刻は心にも無き御無禮を致し甚だ以て相濟ぬ事でムつた

…之れと申すも此の御婚儀を目出度調のはせたいと斗りの儀で別に何等の事も無いので、こゝろ此後とても愈々益々御懇情にあづかりたく只管お願ひ申す』

と詫言を述べ宗固が一献差上げたいと云ふのを辭して半右衛門は歸りました、そデ、宗固は其翌朝番頭の某に禮装を致させ結納の品々を携帶せて半右衛門の浪宅へ遣はし爰で首尾能く結納の取交せは済みましたが果して其夕刻に至りますと宰領人足彼是れ五十人斗り新調の油團を被せた娶入り道具を送つて参りましたが奈何にも大層で簞笥が五個長持が拾棹長刀其外手道具に至るまで夥しい員數で坐敷の中へはいりさらぬ形勢家内

の者はとりぐの評定でムいます。

甲惣うでムいます彼の男が世話をすると言へば大体お里は知れて居ますが此荷物を見ると全然でお姫さまのお娶入と言つても宜い位だ如何な家から引張り出した妻さんかは知らないが餘り立派過ぎる殊に寄ると簞笥の中には襪襦や反古が一杯充満て居るかも知れない……』
「イヤ、其れ所では無い是れは何んでも此身代を見懸けて強盗をしようと云ふ考がえで斯の長持の中へ人數を忍ばせ夜が更ると一度に飛び出し家内中をふん縛つて金銭をまさあげやうと云ふ計略だらう』
「成る程然う言へばアノ半右衛門と云ふ老爺何んだか一ト癖有りさう

な眼つきの悪い男だ』

「是れは油断をすると大變な事になる』

など、奉公人どもが目引き袖曳きツベコベと囁きますので宗固夫婦と忤の宗三郎も半信半疑でムいまして窃と簞笥の抽斗を明けて見ると想像とは全く反對で紗綾縮緬の目の覺るやうな美しくしい新調の衣裳數の分らん程一杯詰め込み又長持の方を見ると對の模様は絹夜具が五重ねもはいつて居る其外の手道具類は何れも黒塗地の金蒔繪光り輝くばかりの實に美麗の品々先づ當時の相場で五六百兩と云ふ評價でムいますから當今の價に致しますと雜と五千圓以上でムいませう主個の宗固は何んだか夢に夢

を見て居るやうな氣が致して婚禮の式を擧る約束を爲た事も何もかも忘れて了ひ只モ一呆然と致して居りますと其翌日の酉の上刻只今娶君のお輿入でムると云ふ先觸が有りましたので一同是はと斗りに驚ろきサア大變だと云ふので坐敷を淨めるやら床の間の懸物を取換るやら上を下への大混雜、ところへ、綺麗なる女乗輿を吊らせまして若黨草履取其外の供廻り都て廿餘人惣押へ兼媒妁人と云ふ格で例の半右衛門が嚴めしき禮服で供に立ち堂々と致して乗込んで参りましたが素より待女郎も何にも無いのでムいますから年配の番頭が迎へに出て駕の戸を明ますと娶御寮には雪耻かしき白綾の三枚重ねお約束の綿帽子のまゝ導かれて一室へ入り

ます其裡坐敷の裝飾が出来たと云ふ知らせを聞まして今回は半右衛門が先に立て設けの席へ進みます之れと同時に宗固の一子宗三郎當年廿五歳色の白い優形の好男子でムいます社袷を着けてキチンと坐に就き是から三々九献の盃の遣取がムいまして半右衛門扇子を把て斜に構へ。

半「あひに相生の松こそ目出たかりけれ」

と祝言の小謠を高らかに謠ひおさめ之れにて儀式が全了りまして新夫婦は別間の臥房へはいり又一方は席を改ため半右衛門を上座に据ゑて祝宴を開かうと宗固が差圖に及びますのを半右衛門は堅く辭しました。

半「御厚意を背くのみで無く御祝宴に臨まぬと云ふのは不延喜に聞えて

畏れ入るが首尾能く御婚禮の式が済みました上は拙者は萬望か之れにてお開きに願ひたうムる」

と云て幾ら引留めても従がひませんソコで主個の宗固は仕方が無いから其れでは恚うか駕にでもお召し下すつてと口を酔くして勤めましたが夫れさへも承知致さず半右衛門は瓢然として歸つて了ふ偕翌朝に相成り娶は始めて舅姑に對面を致しました。

善不調法もの何分ともに御目を懸けられ御慈しみの程を願はしふ存じ上げます」

と兩手をついて挨拶を致しました是れを見て第一に驚ろいたのは舅の宗

固でムいませぬ媒妁の半右衛門が生家も告げず娶の名も知らず無理押付けに婚禮を爲せる位の代呂物如何せ碌な者の氣支ひは無い大方化物から過剰錢を取りさうな醜い女か顔は普通に生れても身體に何か異状の有る不具者か孰れに致せ満足の娶では有るまいと思つて居た處が案外の仕合せでムいまして其容貌の艶麗さ詞つきの優しさ態度の氣高さと云たら公家大名のお姫様だと申しても誰も嘘言だと云ふ者は有るまいと思ふ程で實に柳の枝に櫻の花を咲かせ梅の香ひを持せたと云ふやうな絶世の美人でムいませぬから呆れて暫くは明た口が塞がらず感心致して居りましたが願て兩手をつきまして。

寧ろイヤ恚うも畏れ入ります半右衛門どのお生家のお名前も仰有らず自己が請合ふからとの事で御相談に預り御縁がムいしましたものと見えでお越し下さいまして手前の方では大悦びでムいませぬが御容子を見上げますと却々我々づれの卑しき者と御縁組を遊ばしますやうな御身分とは存じられませぬ一体尊嬢さまは何れの姫君に渡らせられますや
お伺ひ申し上げます』

餘まり美しくしいのと氣品だかいので宗固老人面食つて了つて主君でも迎へたやうに兩手をついて恭しく述べたてましたので娶は思はず顔を赧らめまして。

「姫君など、仰せがムいましては畏れ入ります。今は何をかお隠し申しませう。妾は去る元祿の十五年十二月の十四日江戸表本所松坂町の高家吉良上野介との、御邸宅へ推參に及び少將ごの、御首級を頂戴致して亡主の存念を果しました大石内藏助の娘でムいます。之れを聞きました宗固老人。」

「呀苦……」

と謂て驚く評子に入齒をとつばずして大騒ぎを演かしましたが大石を神さまの如くに尊んで居る老人だから其娘と聞いて泣出しました。

「嗚呼勿體至極もムいませぬ其れでは尊嬢さまは大石内藏助さまのお嬢さままで入らせられましたか。然んな事とは夢にも存じませぬ失禮を致しまして今更ら面日次第もムいませぬ……オイ婆アさんお前も其處で伺つたらう此のお方は内藏助さまのお嬢さま普通の娶なご、心得ては罰が當る其積りでお禮を申し上げろ……」

「スルト又た此の婆アさんもとつちたと見えまして。女房「オヤ、其れでは唐と日本に只二人と云ふ忠臣の鑑み大石さまのお嬢さまでムいましてか之れは寔とに冥加至極有難き仕合せ」

と袂から珠數を出して拜んだと云ふ之れは少々當になりませんが何にしる宗固の宅では三國一の娶さんを取當たと云ふので家内中が散動きわた

りまして俄かに春が来たやうでムいます暫時く致して漸と宗固老人氣が沈着きまして。

宗「一寸伺ひますが其大石様のお嬢さまとも有るべき御身分恁ういふ思し召で素町人の我々方へお興入れ下さいましたか又半右衛門どのとは如何やうな御縁合で入らせられまするか一と通り仰せきけられたう存じます。

是はく畏れ入ります以前は内藏助の娘に致せ今日よりはあなた方お二人さまの御子息の娶其やうな御慰懃のお詞ではお返事がなりかねますお訊問の半右衛門事は大石家に長らく奉公を致し主家退轉の砌り

父より私を預りまして此都に止まり或る方へ私しを隠し置き貧苦の中を養ひくれました家來ながらも私には大恩人昨日御當家へ興入れを致します節儀式が濟んで始めて御兩親さまへ御目通りを致したら是れを御覽に入れてくれると申して私へ興へました品がムいます」

と帯の間から取出した固く封じてムいます一通を其處へ差置きましたので宗固は訝かしげに手に取りあげて披いて見ますト始めに自分は内藏助の家來であると云ふ事を書き其れより浪人中長らく入魂にしてくれた禮を述べ此娘は主人が敵討を思ひ付た際深く後事を考がへ自分の子にして成長させ然る可き町人へ嫁しづかせてくれと三百兩の養育金を添て

托されたる以來山科の或る由縁の寺へ預け置き其後夫れと無く良縁を尋ね居りしに幸ひにも去る正徳の元年御子息宗三郎ごの、娶御を頼むとの仰せを承はり貴殿御氣性お家柄等も承知罷在り實に願ふても無き仕合と心得既に其砌り此事を打明け御相談に及ぶ可く存せしも其節は未だ十六歳の處女にて幼弱の身なればせめて廿歳近く成るまでと存じ三年の御猶豫を願ひ置き其間だ聊か心を竭して二百兩の金子を拵へ曩に預りある三百兩に合せ都合五百兩として支度萬端調のへたるが最初より生家を告げず御相談に及んだのは萬に一ツ内藏助の娘と聞かれ公議を憚かり御辭退下すつては残念と存じ故意と何事もお明示申さず結納取替せの節も無

禮を極めたる振舞に及び強て御承知を願ひしは何共申譯け無き次第偏へに御宥免を蒙り度拙者事は主人の遺命を果し最早此世に何等の希望も無き體追腹切つて冥土黄泉へ罷越し此回の始末を主人へ申し聞け長く傍に在つて奉公仕る心底に御座候返すくも世に便り無き孤兒に候得ば幾久しく御愛憐の程を奉願上候と認めましたる遺書で亙いますから宗固親子の驚きは云ふも更なり内藏助の娘も斯くと聞て眼を押掛ひ家來とは言ひながら此年來の心遣ひ我身斯くて在ん程には安らかに一生を過させ實の親にも劣ざる養育の恩に酬はんと思ひしものを偕て死なしたり残念なりと件んの遺書を顔に當て悲歎の涙にかきくれましたのは道理

千萬でムいます頼て宗固は倍となつて立上り。

宗『個程の忠臣をムザくと殺して了ふのは如何にも残念の次第夕べの今日だから間に合ふまいとは思ふが兎に角出掛けて行き幸ひに未だ生きて居たら道理を説て切腹を思ひ止らせやう早く駕を然う言つてやれ大急ぎで往つて来るから』

宗固は慌て忙き駕を飛せて四條堀川の半右衛門が浪宅へ駈けつけました。が最う間に合ひません半右衛門は前夜宗固方を辭して我が家へ歸り近所の者を呼集めて酒宴を催ふし。

半『長らく皆さんのお世話になつたが我儕も今回據るなく故郷へ歸る

のだが其れが急に明日となつたので心斗りのお禮がしたく夜更けさふけに御迷惑でムらうが萬望か十分に吞んで下さい其れに今一ツお頼み申すは此家財道具で目ぼしいものとは何にも無いが我儕の紀念と思ひ一ト品づゝ貰つて下さい』

と道具類を一同に分ち與へ自分も快く一盞を傾け皆々を歸したる後ち心静かに切腹して相果たのを今朝長屋の者が發見し奉行所へ訴へ出て今ま役人が來て檢視に及んで居ると聞き宗固は落膽り致しましたが仕方がありませんから檢視の役人に對ひ所縁の者と云ひ立て半右衛門の死骸を貰ひ受け之れを鳥邊山に葬むりまして懇ろに追福を營みましたが内藏助の

娘と宗三郎の交情は至つて睦まじく間も無く一子を儲げ其家長く繁昌に
 及んだと申す事で大石家の系譜に有る名無し娘と云ふのは此者で有るか
 と考がへます是れは『祇園了音物語』と申す寫本中のお話してまい
 ます。

名あし嫁終

大正二年七月廿五日印刷
大正二年七月廿八日發行

(定價金貳拾錢)

不許複製

義民宗吾傳

發行所

大取次販賣所

東京堂、東海堂、北隆館、至誠堂、長明堂

講談社

電話下谷四〇五九

東京振替貯金口座六六二九

(所刷印社談講 所刷印)

著作者

洞殿司

發行者

野間清治

印刷者

金山佐次

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地

寺澤琴風
先生新著
井川洗厓
先生口繪

佐和山主水

三五版袖珍
百七十餘頁
金二十錢
送料金二錢

石田三成の遺子主水と福島丹後守の娘八重とを主人公として、大阪落城後の關西武士の意氣地を書いたもの、武士道の義理と戀愛の執着とが、縦と横とに織り出されて、勇士の切り結びとなり、遊女の張りとなり、深編笠の名將も出れば、かけ茶屋の娘も出る、近畿を舞台としての面白い物語りです。

倉富砂邸
先生新著
井川洗厓
先生口繪

祖先之家

三五版袖珍
百八十餘頁
定價二十錢
送料金二錢

これは新しい試みで小説を講談風に書いたものです、露西亞の文豪トルストイの傑作アンナカレニナの梗概を全く日本式に書きかへたので一寸肌がちがつて居ます、西洋物を味ふには好適と存じます、附録には佛國の文豪モーパッサンの短篇小説「葬式」と云ふのを翻譯してあります

小川煙村
先生新著
高島華宵
先生口繪

名物男

三五版袖珍
百八十餘頁
定價二十錢
送料金二錢

著者自ら巻頭に題して「雨の夕風の夜、嘶の種になるやうにと思つて、茲にためになる話を集めた……から読んで貰ひたい」と云つて居る、古來英雄とされて居る人々の事蹟を選んで總て十八編、氣のきいた筆致で誰れにも讀めるやうに書いてある。殊に少年の讀み物として賞品や贈り物に適はしい。

夢想兵衛
先生新著
井川洗厓
先生口繪

本村長門守

三五版袖珍
二百六餘頁
定價廿五錢
送料 四錢

花々しい桃山時代の最後、大阪城の落ちる時、内兜に伽羅の香を焚いて出陣し見事な最後を上げた少年武士本村長門の生ひ立ちで、まだ綱千代と云つた頃、恩師の愛嬢尾花姫との美しい戀物語を骨子として作者が最も力を注いだ優秀の傑作です。是非御一讀を御すゝめいたします。

光焰 萬丈

雄

辯

趣味 清新

毎一月一回日發行部一廿錢送料
一錢半〇年壹圓拾錢(送料共)

本邦唯一の辯論機關として創刊既に五星霜を經、誌運愈々
隆々と天下獨歩の概ある本誌
して天下獨歩は徹上徹下 眞面目剛
健なる 雜誌界の珍として囑望せ
らるゝや切也收むる所は

内外大家の高論卓說新進青年の縦論横議

に於て犀利 天下の經論を吐 一代の思潮
なる舌鋒 風發の論談を以て一警醒するに足るべ
を語る 其の他 文學に隨筆に記事に史傳に、鍛鍊の文字以てよく趣
味の横溢するもあるべし、苟くも

向上的青年、辯論に携はれる紳士

の必讀せざるべからざるや言ふを要ざる也。

東京市本郷町下坂八
東京市本郷町下坂八
振替會 〇三九三
日本雄辯會

大日本雄辯會編輯

青年雄辯集

三六版函入
七裝百餘頁
表裝百餘頁
目下印刷中

青年は時代の花である。立憲帝國の青年には大雄辯があらねばならぬ。此書は最近數年間に於
て、官、私立の各大學生を初として全國の青年雄辯家が其の眞摯なる熱情を吐露して不爛の舌
端より迸發したる雄辯集也、從て諸大家の往々試むる事ある其場限りの一場の駄辯とは大に其
選を異にして悉く之れ勉勵と努力と修練とが生める生命ある活文字なり。久しく囑望せられて
其機を得ざりしが、今回漸く發行するの運びとなれり。故に普れく天下に弘布して其精神を傳
ふると共に一面には演說研究者の同伴ならしめんがため、價格の低廉と、携帶の至便とを計り
尙ほふりがなを附して出版することとせり。七月中旬に發行するを得べし。

發行所 東京本郷駒込坂下四八 大日本雄辯會

誌 雜 刊 月

部 樂 俱 談 講

一冊 金廿六
 郵税 郵税 郵税
 二稅 共稅 共稅
 錢 拾圓 二共
 錢 五拾圓 二共
 錢 十二圓 二共

誰が讀んでも堪らなく面白い
 雑誌は「講談俱樂部」であるといふ
 事は世間の定評です。毎號講談落語
 浪花節小説脚本活動寫眞演藝評判記
 などの素敵に面白いものがドツサリ載
 せてあります。それに口繪は眼が醒め
 さうな綺麗なものばかり集めてあ
 りますから、春は花の下、夏は涼み臺
 秋は燈火の下、冬は埋火の邊り、皆様
 がお友達としてこの上もない雑誌
 誌であります。

東京本郷講
 談俱樂部
 坂子園
 社
 九二六六座口

實 事 る す と ツ ズ

- ▲美探し洋妾お梶の探偵
- ▲神出鬼没短銃強盜清水定吉
- ▲聯隊旗の行衛烈婦村田さは子
- ▲樂通殺し呪の古井戸
- ▲三強盜湯島兩替店の秘密
- ▲最近實話探偵十種
- ▲暗殺史少警部中原尙雄
- ▲強盜犯人阪本慶次郎逮捕の顛末
- ▲志士の末路大臣暗殺の陰謀
- ▲素人盜落語家文太郎の入墨
- ▲殘忍薄漆屋殺し事件

明治三十三年刑事
 學校に於て、故武
 東警部が實歴の講
 演をした事がある
 本書は主として材
 を此に取り、其他
 當時の新聞紙及老
 刑事の實歴談に依
 りて成りたるもの
 片々たる架空談と
 同一視すると勿れ
 定價一部六十八錢
 郵税六錢三〇〇頁
 東京本郷園子坂
 發行所 講談社
 口座六六二九

一 讀 鬼 氣 人 氣 逼 る

大山千代雄著 英雄を造つた英雄傳

ブリュターク英雄傳

四六判美裝約二百五十頁 正價五十錢郵稅六錢

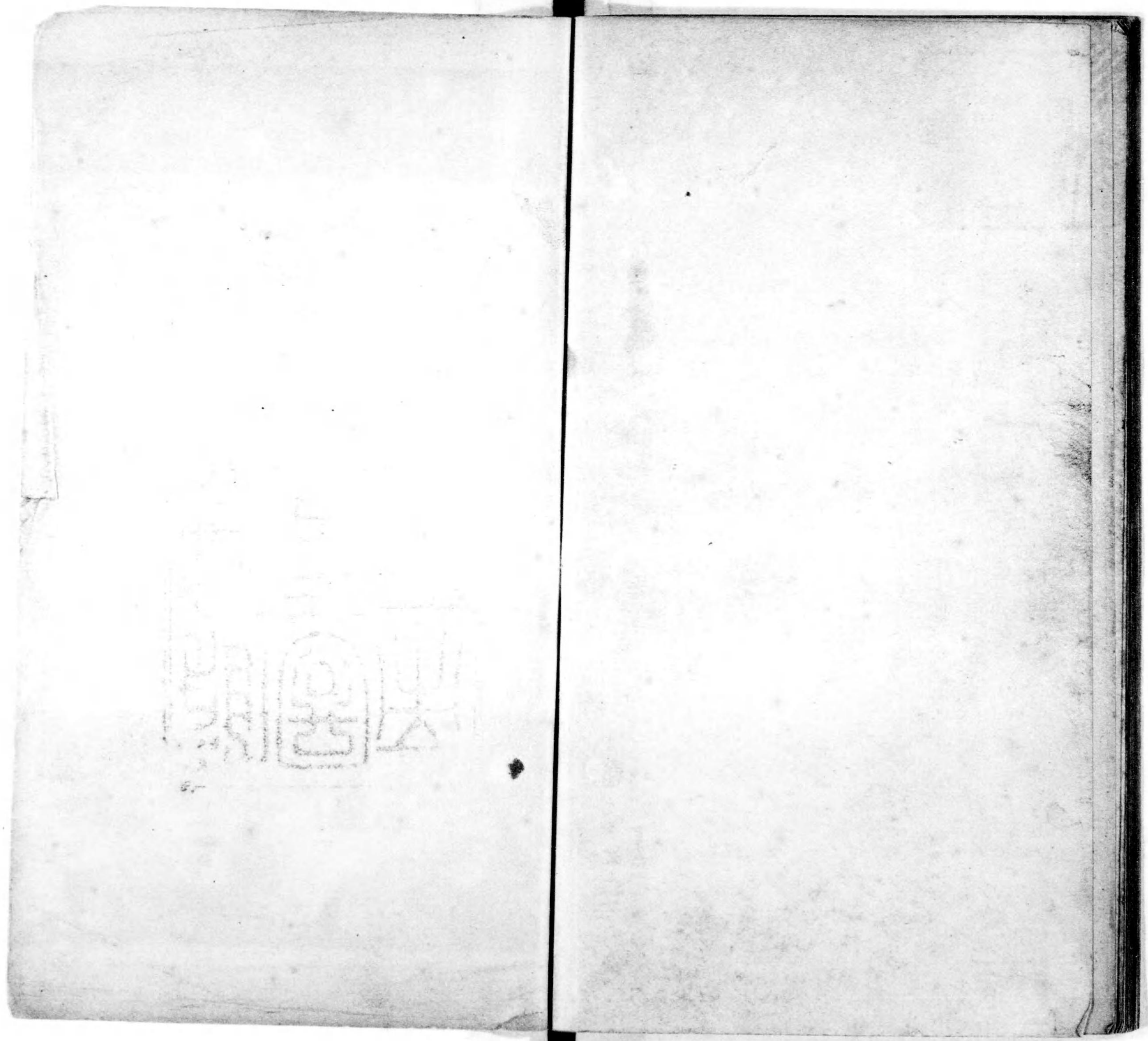
題 目

- 一、歴 山 大 王
- 二、シ ー ザ ー
- 三、ハ ン ニ バ ル
- 四、ブ ル タ ス
- 五、テ ミ ス ト ク レ ス

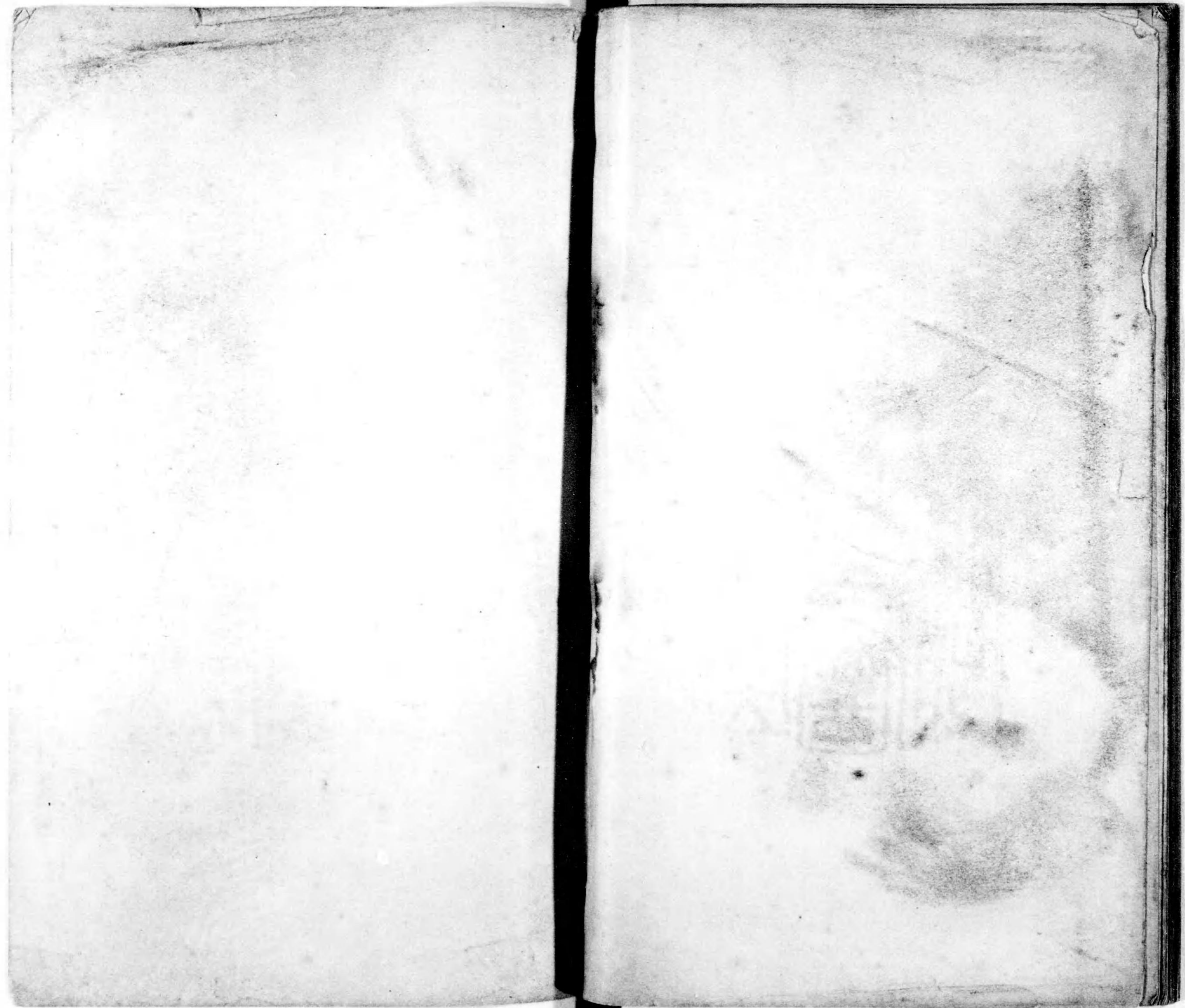
英雄を造れる英雄傳にして世
 界到る所好評湧くが如きの活
 躍史。ナポレン、リンコルン
 等が愛讀して措かざしもの、
 希望多き有爲の青年は飯をや
 めても之れを讀まれよ！

發行所 本郷駒坂町 大日本雄辯會 三三〇九座

274
347



明倫彙編
家範典
卷之...



終

